

## 潔癖症と笑うなかれ

ㄱㄴ 真理は隠れている。探し出すのはあなた自身だ。 小野しまと

☆ ☆ ☆

韓国ドラマ「私の名前はキム・サムスン」(第4話)を見ていて、非常に面白い場面に出会った。主人公の菓子職人サムスンと、彼女が勤めているレストランの若社長ジノンとが、一緒に缶ビールを飲む場面だ。

ジノンは、自分の飲む分ばかりではなく、サムスンのためにも缶ビールを一本開けてやるのだが、そのフタの部分をハンカチで丹念に拭ってから手渡す。

「いつからそんなに潔癖症になったの？」とサムスンが尋ねると、ジノンは、父親の真似をしているうちにそうなったのだと答える。

私が面白いと思ったのは、なぜこのようなシーンとセリフを、わざわざこの個所に入れたのかということであった。

ドラマの展開に、何かこのような一場面を挿入する必然性があったのだろうか。若社長ジノンの今後の行動を暗示しようとする伏線だったのであろうか。

第4話の段階ではまだ何とも言えないが、ジノンの缶を拭く行為といい、サムスンの「潔癖症」云々の質問といい、それに対する答といい、何か監督キム・ユン Cholの隠された意図がそこにあるようで、なんとも面白い描写だと思ったのである。

毎日のようにケーキの材料を素手で掻き回したり、捏ねたりしているパティシエール(菓子職人)のサムスンこそ、むしろこの程度の清潔感を持ってもいいと思うのだが、彼女はドングリ眼をして「いつからそんなに潔癖症なの」と聞くのだから、困ったものである。

缶ビールやその他の缶飲料を飲む前に、自分が口を付ける部分を気にする人は、日本人にもかなり多いのではないだろうか。ハンカチやティッシュで擦っている人を時々見かけるし、中には服の袖やシャツの端で拭く人もいる。

ちょうどリンゴを丸かじりする時と同じで、気休め程度にちょっと拭いたあと、じかに口を付けるのが普通だ。しかし、実のところ、これでは何のために拭いたのか、効果はあまり期待できない。

「気休め」という言葉を使ったが、ハンカチで擦ったぐらいでは、ただ擦ったというだけで、汚れが除去されたわけではない。

韓国ドラマに出てくる若社長のジノンにしても、真の潔癖症と言われるためには、缶を除菌剤で拭くとか、せめて水道の水で洗ってくるかしなければ、いっばしとは言えないであろう。

そもそも何のために拭くのかということが問題であって、殺菌のためという答がまっさきに思い浮かぶのだが、実はこれは建前としての答であって、誰もがいちいち殺菌のことなど考えて缶を拭いているわけではない。

たいていは、それ以外のもっと気分的なものが原因であって、一例を挙げると、他人の指が触れたかも知れないような個所に、じかに口付けなどできないという感情がある。缶が除菌処理されていたって関係ない。誰かの指と間接的にせよキスするなんてまっぴらだ、というのが正直な気持ちであろう。

それで、「気休め」のためにせよ、何かでちょっと缶のフタを擦ってから口を付けるという行為を取るのだが、私たちは、この行為から面白い事実を読み取ることができる。

多くの人は、心のどこかで、意識的にせよ無意識的にせよ清潔を求めているという事実である。そうでなければ、缶を擦るというムダな行為などわざわざ取り入れないで、いきなり口を付けるであろう。

リンゴを丸かじりする前に、服の袖などでしきりに擦っている人は、キレイな食べ物がほしいというよりも、むしろゴミとか虫などの余計なものを一緒に食べないようにしているのかも知れない。だが、それでも、彼が求めているものが、やはり或種の清潔であることは間違いないのである。

このように、多くの人が心の中では清潔を求めているくせに、それを「気休め」程度の行為で片付けてしまう。悪く言えば誤魔化してしまう。人前ではそれ以上のものは見せない、というのが一般的なのではないだろうか。

清潔好きであることを恥ずかしがる傾向があるのだ。人前であまり清潔好きであることを見せると、人づきあいの悪い奴だと思われてしまう。虚弱な奴だとか、めめしいとか、神経質だなどというレッテルをすぐに貼られてしまう。

私の感触では、特に日本人の男性にその傾向が強いのだ。日本人の清潔好きは世界的にも有名で、日本へ来た外国人の多くが最初に受けるカルチャーショックは、日本人の生活習慣に見られる清潔感だと言われている。このことは、BS放送の番組クール・ジャパンを見ても納得できるであろう。

表面では清潔好きをできるだけ隠そうとする傾向がありながら、それでも外国人の目にはそう映ってしまうのだから、日本人の清潔好きも相当なところまで行っていると言えよう。

日本で「清潔好き」と言われている程度の人が、外国へ行って地のままで生きようとすれば、間違いなく「清潔マニア」あつかいされてしまうだろう。(清潔感の外国との比較については、拙著『清潔マニアの快的人生—永遠のキレイを求めて』ビワコ・エディション版を参照されたい)

戦前日本に来た中国人や欧米人も、日本の清潔文化の高さにカルチャーショックを受けた点では例外ではなかった。例えば、横浜と神戸の中華街で出される料理は、本国では考えられないほど清潔なものだが、その理由は、華僑の日本への適応があったからだと言える。

フランス料理にしても、全般的に言えば、日本のレストランで出されるもののほうが清潔度が高い。これは六年半にわたるフランス生活で私自身が体験したことだし、日本でレストランを営んでいるフランス人の知人もそのことを認めていた。

韓国ドラマのレストラン経営者ジノンが、缶ビールのフタを拭いたことで、「いつから潔癖症になったの？」とサムスンに聞かれ、「父親の真似だ」と答えたことに、私は文化の伝播と逆転を見たよ

うな気がした。

現代の日本人はどうやら別の方向へ進んでいるようなのだ。目を丸くしてジノンに問いかけるサムスンのほうが、現代の日本人に近いと言える。ジノンのほうはむしろ、古い日本人の行動を思わせるのだ。

同じドラマの中で、サムスンが菓子を作っているところへ、帰り支度をした同僚のパティシエールがやって来て話をする場面があった。同僚の女は、菓子を乗せる台の上に、自分のハンドバックを無神経にポンと置くのだが、サムスンのほうも、これに対してまったく無頓着だ。

ここにジノン若社長がいたら、どんな態度を取っただろうか。彼の「潔癖症」はまだまだ序の口である。缶ビールのフタをハンカチで擦るぐらいでは、真の清潔好きとは言えない。そもそもハンカチの清潔度を考える必要があるし、一番問題なのは、缶のフタを引き上げる自分の指がキレイかどうかということなのである。

しかし、それでも、社会に「潔癖症」が存在し、「潔癖症」を自認する人間がいるかぎり、可能性は残されている。何の可能性かと言うと、何が真に清潔で、何が真に不潔なのかということを知ろうとする意志の可能性なのだ。清潔を目指す意志なしには、人間の文化向上はあり得ないと言っても過言ではない。

最近のバラエティー番組を見ると、いつも若い世代が食べまくっている。彼らの中には、清潔感などどっかへ置き忘れてしまったような若者も多いのだ。

時たま、古い日本人に属するようなベテランタレントが、不潔なものはゴメンだとばかりに尻込みをすると、みんなから野次られ、いいお笑い種になってしまう。

どうやら、文化的であるよりも、野性的であろうとする風潮が強くなっているようだ。もちろん、人間どうしの連帯や友愛ということを考えるならば、ちょっとした野蛮さなど乗り越えねばならないこともある。

相手のライフ・スタイルをまったく無視して、自分のやり方ばかりを独善的に、これ見よがしに示すのは良くないし、守らねばならない社交儀礼の線があることは言うまでもない。

BSで放映された関口知宏の中国旅行記からは、色々と教わることがあった。しかし、ただ見ているだけならば良いが、自分には決して中国は旅行できないと思った者も少なくはないであろう。自分にはあんなふうに何でもかんでも食べることはできない、と。

こういう清潔意識を非人間的だと言って非難する人がいるかも知れない。だとしたら、周りにいる友人たちがやたらとツバを吐く者ばかりだったら、自分も一緒になってツバを吐きまくれということになるであろう。他文化との交流はそんなに容易いものではない

「寄生虫博士」の名で知られる藤田紘一郎氏が書いた本は、私の愛読書でもあるが、その中に出てくる記者の一人が、博士の部屋のドアに触れたあと除菌ティッシュで指を拭いたり、博士と体が接触することを怖れて逃げまくるさまが描かれている。（「空飛ぶ寄生虫」講談社文庫）

私は、この神経質な記者を笑ってはならないし、ましてやバカにしてはならないと思うのである。

食器を始め様々な道具文化を造りだしてきた人間の原点——医薬品を発明し、医学を発展させてきた人間の原点に、このようなマニア的精神があったことを我々は認めねばならない。

この記者のように多感な人間が、病的な潔癖症や不潔恐怖症の状態にとどまらず、真の清潔を目指し、それを探究する方向へ進むかぎりにおいてではあるが。

私は、清潔志向を軽蔑する人々の内にも、どこかに日本人の古いマインドが残っていて、清潔への想いを完全には断ち切っていないところがあるから妙なものだと思う。

リンゴを一個手に取って、服の袖で擦っておいて噛みつけば、それはそれなりに格好良いと思われている。この場合、ハンカチやティッシュで拭いては様にならない。いちばん汚い個所で拭くからこそ格好がいいという逆説があるのだ。

しかし、それほど清潔ということを見下したいのなら、いっそのこと、拭くこともやめてしまって、汚いリンゴにいきなり噛みつけば、もっと格好良いのではないだろうか。

[2007/11/22 magmag]